

38. 辻野 晃一郎氏（アレックス株式会社 代表取締役社長兼 CEO）

「北九州市は昔から、世界に目を向け発展してきたまち。北九州市の背中を見て日本全体がついてくるようなリーダー的役割を果たしてほしい。」



辻野 晃一郎（つじの こういちろう）

北九州市出身。

慶応義塾大学大学院工学研究科修了。カリフォルニア工科大学大学院電気工学科修了。ソニー株式会社入社以降、VAIO、デジタル TV、ホームビデオ、パーソナルオーディオ等の事業責任者やカンパニープレジデントを歴任。その後、グーグルに入社し、日本法人の代表取締役社長を務める。

2010年10月アレックス株式会社を創業。

「世界的企業家輩出の歴史を若い世代に」

北九州市は、ものづくりのまちとして栄えてきました。また、出光興産(株)を創業した出光佐三、TOTO(株)を創業した大倉和親をはじめ、錚々たる起業家を輩出し、旧八幡製鉄（現日本製鐵）や安川電機など、歴史的にも名だたる大企業が立地しています。この地で誕生した大企業や、この地に生まれ、世界に羽ばたいた先人たちについて、学校教育の現場等々においてしっかり伝えていくことは、郷土への愛や誇りを育み、世界的な視野で地元を発展させようというエネルギーを喚起する上で、極めて重要ではないでしょうか。

「都市間連携など広域的な視点を」

世界第2位の経済大国であったわが国は、今や衰退国家であると言え、その中に北九州市があることを正しく認識する必要があると思います。いわば沈みゆく船に乗り合わせているような状況下において、九州全域や日本の他地域と無関係に北九州市だけが発展することは不可能です。九州全体、ひいては日本全体の発展につなげる方法を考えねばなりません。

例えば、関門経済圏における下関市との連携や福岡市との連携など、広域的な視点を持つことが求められます。具体的には、例えば、北九

州空港を九州国際空港として刷新し、混雑している福岡空港との役割分担を明確にして、日本にこれまでにない「ハブ機能」を持たせることなどを考えても良いでしょう。また下関市と連携した港湾整備や漁港の近代化などのアイデアもあるでしょう。

「高等教育とその受け皿となる産業育成が肝要」

人口の流出、特に若年世代の流出の要因としては、大学等の高等教育機関の選択肢が少ないことが挙げられます。世界一流の教育が受けられる教育インフラをしっかりと作れるかどうかは、若い世代の流出を防ぐのみならず、市外や海外からの人材呼び込みのきっかけとなりうるのではないのでしょうか。

加えて、大事になってくるのは、この北九州の地に残って働きたいと思える産業を育てていくこと。これがなければ、教育インフラを整備しても、東京や大阪をはじめとする大都市への人口流出は抑制できないでしょう。

これまで、北九州の産業は製鉄や化学など重化学工業が軸でエンジニアリングに強みがありますが、今後はロボティクスやソフトウェア、AI も含めて最先端のテクノロジーを掛け合わせることが重要です。北九州市には、素晴らしい農産物や海産物もあり、テクノロジーに関し

ては、農業や漁業などの第1次産業においても取り入れていくことがポイントです。

また、半導体関連産業の復活を目指した投資機運が高まっており、熊本のTSMC誘致や北海道のラピダスの工場建設が決まっていますが、地元を巻き込みながら、それらを凌駕するような拠点形成ができれば、北九州市の明日にとって面白いと思います。

「課題解決の先進都市へ」

人口減少やそれに伴う産業の縮小など、全国で様々な課題が山積する中、北九州市がそれらの社会課題に対して、他の自治体の先頭に立って取組を進めていくことで、課題解決の先進都市として注目されるまちになることができるのではないのでしょうか。

北九州市は、国家のレジリエンスの観点から、地震の少なさを活かしたバックアップ機能を担うポテンシャルのある都市で、クラウド企業のデータセンターや、物流企業のウェアハウスなどの立地候補として魅力的です。また、環境問題など国全体の課題に対して、北九州市が率先的に取り組むことで、世界のベンチャー企業などからも注目されるまちになると考えます。

視点としては、地域主導で社会課題に取り組む、生まれた成果を全国に広げていくことで、国をも動かすムーブメントになるかもしれません。それにあたっては、独自の子育て政策の推進による成果が表れている明石市や、人口増が実現している福岡市など、他都市の成功事例をベンチマークすることも大切です。

それから、北九州市が広い視野をもってこれからの政策を考えていくためには、市の職員のみなさんが、グローバルな視点や考え方を持ち合わせる必要があります。職員の皆さんも、たくさん外に出て、見て、経験することが重要だと思います。

「このまちには様々な将来の方向性がある」

以上、北九州市が目指すべき都市像としては、これまでの歴史や蓄積してきた技術、地理的優位性等を考えると様々な方向性が考えられると思います。産業振興の視点からは、「最先端のエンジニアリングのまち」。また、将来それを支える若い世代の視点からは、「科学技術教育が充実したまち」、国家のレジリエンスの観点からは、「災害に強いまち」等です。

これらに共通して言えるのは、前述した通り、これまでのこの地における起業家精神を踏まえ、東京や大阪など国内を気にするのではなく、インドやマレーシア、シンガポールなど、発展著しいアジア太平洋地域に目を向け、グローバルな視点を持って、むしろ東京や大阪に背中を見せて進んでいくのが良いと思います。その背中を見て、日本全体がついていきたくなるようなリーダー的な役割を北九州市には是非担って欲しいと切に願っています。